

平成 28 年度関門地域共同研究会 成果報告会

ミニシンポジウム「地方創生と関門観光 - インバウンドの可能性」開催記録

日時：平成 28 年 5 月 16 日（月）14：00～16：30（うちミニシンポジウム 15：35～16：25）

会場：海峡メッセ下関 801 大会議室

主催：関門地域共同研究会

パネリスト：

公認会計士 中小企業診断士	久留島雄一 氏
北九州市産業経済局観光にぎわい部集客交流担当課長	宮崎 彰三 氏
下関市観光交流部観光政策課 課長	藤原 良二 氏
北九州市立大学副学長・地域戦略研究所長	柳井 雅人

コーディネーター：

下関市立大学附属地域共創センター長	難波 利光
-------------------	-------

登壇者の所属は開催当時のもの

1. 趣旨説明

〔下関市立大学 難波 利光〕

それではこれから、2 部といたしましてミニシンポジウムを行いたいと思います。テーマは「地方創生と関門観光 - インバウンドの可能性」です。この趣旨は、歴史的なものや食べるものとか先程色々なお話が出てまいりました。最初論文を書いたときは、それぞれがさほどそこまで近いテーマではないかなと思いながら書いたと思うのですが、今報告を聞いてみますと、すべて繋がるテーマであることが、すごく実感として湧いております。報告から、自治体であるとか民間、住民と一緒に、一緒に取り組むという機会がこれから益々増えていくというふうに考えられている訳です。そうしなければ、恐らく自治体が地方創生の中で維持できないと思われま

す。1,700 ある自治体、平成の大合併がありました、これから更にもしかするともっとリストラされていくのではないかとということも数年かけて後には起こる事項であると思います。下関は 28 万人都市ですけれども、あと 20 年後には 20 万人都市くらいと言われております。その状況に相まって高校生の数は、今から 20 年後には半分になると言われております。要は、地方都市にどれだけの若い人たちや生活をする人たち、それから財政面で言えば税金を納めてくれる人たちが、どれだけの地域にいてのかということが先程の共同であり共創するという、一緒に手を結びながらどう競争、戦っていくのかということもこれから色々模索していかないといいない局面であると思います。その中でいま観光政策、ここが非常にフォーカスを浴びて経済効果も高いというお話しが今までも出ておりました。

私が長くなるとあれですので、報告会のパネリストの順番で久留島さん、宮崎さん、藤原さん、柳井さんの順番にて5分以内程度で今の観光政策等につきまして、それぞれの目線から私見を述べて頂ければと思います。では、久留島さんの方からよろしくお願いします。

2. 地方創生のための観光施策の実践と提案

〔公認会計士 中小企業診断士 久留島 雄一 氏〕

ただいまご紹介いただきました久留島と申します。私は普段会計監査と起業支援・起業コンサルをやっています。本日はよろしくお願いします。

私の方から私見といたしまして、大きく2つ観光について考えるべきポイントがあると考えています。1つは観光を大手旅行会社に任せっきりにしない。もう1つは利益を出す仕組みを作る。この2つが非常に重要であると考えています。まず1つ目の大手に任せっきりにしないという事なのですが、観光の形態を大きく2つに分けた場合、発信型と着地型というのがあります。発信型というのが従来からある大手旅行代理店などが、例えば下関であればふく観光コースだとかを都心部で、本社で事務作業をしながら旅行プランを考えることを発信することです。着地型は、旅館をやっている方や漁師をやっている方のような地元の方が、旅行プランを考えることです。そういう着地型のプランを考えていくことが非常に重要であると思います。

それを実施している企業としていくつかのベンチャー企業もあるのですが、例えば地元の農家のおばさんと一緒にスーパーに行き買い物をすることや、食材を持ち寄って一緒に料理を作り食べるなどが旅行プランの1つとして売れているのです。地域の観光は、ショッピングモールであるとか歴史的建造物が必要であると考えているのではなくて、よく釣れる魚の捕れる穴場があることを紹介することが観光資源として活用できると考えています。したがって、そういう着地型の観光を地元の方が提案していくのが非常に重要ではないかなと考えています。

あともうひとつ利益を出すという事なのですが、やっぱり地元の責任者が責任をもって観光に取り組んで頂いて、儲かったお金で再投資ができる仕組みを作るというのが非常に重要だと思っています。例えば従来型ですと、行政の方から支援を頂いたりして一時的にお金が入って、イベントやキャンペーンをしていたと思います。ただそれは、継続的に出来るのかとか、補助金がなくなったらその観光事業はどうなるのかっていうことを考えて頂きたくて、まずちゃんと利益を出すことが非常に観光として重要なポイントだと私は考えております。

もう一つ重要なのは地元の人がきちんと事業にタッチすることだと思っております。外部から来た、例えば大手ショッピングセンターの方が観光に携われると、その儲けっていうのが地元外に流出してしまいます。きちんと地元の中でお金を残して次の再投資に繋げていくのが、観光を考える上で非常に重要なのかなと思っております。いきなり多額の投資は必ずしも必要ないと思っております。できる範囲で、例えば今下関市だと学生の方がまちおこし等やられていると思いますが、そういう学生さん達の出来ること、誰でもできること、考えた人がすぐやれることから始めて、小さく始めて大きく育てると良いと思います。いきなりでかい投資

をして失敗するのではなくて、何回でもやり直せるのだと、そういう姿勢も非常に重要じゃないかなと思っております。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございます。引き続きまして宮崎さん。よろしくお願いいたします。

〔北九州市集客交流担当課長 宮崎 彰三 氏〕

北九州市観光にぎわい部の集客交流担当課長の宮崎と申します。本来と言いますか、北九州市役所には門司港レトロ課というところがございます、そこがまさに関門連携あるいは関門地域のインバウンドも含めて担当しているのですけれども、私も観光あるいは MICE ということで色々担当しております。そういった視点からも今日は発言できればと思っております。また、4月に異動してくる前まで北九州市役所の中でアジア交流課という所におりまして、インバウンドの視点も色々見てきたところがございますので、そういった話も出来ればと思っております。

関門エリアの観光資源についてはもう先程からも様々なご紹介がありましたとおり、非常に魅力的であるという事。また、特に海外のお客様から見れば歩いて移動できる範囲内で観光ができるという事もまた人気の高いエリアの理由として聞いております。外国人観光客には、特に1か所だけではなく複数の都市を周遊したいといった志向もございますので他の自治体と連携を図りながら魅力ある広域観光ルートを作っていくというのが非常に大きな課題ということで捉えております。下関市さんとの関門連携の形でございますけれども、まず一つ目として民間主体で行っておりますのが、関門海峡観光推進協議会がございます。行政の他ホテルですとか観光施設など民間と、官民一体となって組織している協議会がございますけれども、共同で海外へのプロモーションということで海外の旅行者あるいはマスコミ等の招聘事業なども取り組んでおります。特に台湾の誘客ということでこの協議会では力を入れておまして、これまで現地旅行社へのセールスに継続して取り組んできている所でございます。

その成果が実を結びまして、現在では関門エリアに台湾からの団体ツアーバスを見かけない日はないと言われるほど連日台湾人観光客で賑わっているということでございます。また外国人観光客に滞在を楽しんで頂くということで、多言語のパンフレットを作成配布したり、あるいは共同でWi-Fiの環境を整備する、そういったことも行っております。それから次は少し行政主体の話になるのですけれども、北九州市と下関市は東アジア経済交流推進機構という日中韓の11都市で作る都市機構の会員都市であります。その中で北九州市と下関市が中心的な役割を担っているのですけれども、共同で東アジアを中心として国際旅行博覧会に観光の出展などを行っております。

最近では東アジアだけではなく、共同でタイにプロモーションに行ったり、あるいはこの機構の取り組みの中でタイ語のパンフレットを作ったり、セールス活動を行ったりもしております。今年度は新たにベトナムについても共同で観光PRに行こうということも伺っております。

関門連携を通じて新たな市場の開拓ということも行っております。今後とも積極的に連携を図りながら、先程自治体として連携することの意義などお話ありましたが、連携を図ることによって外国人観光客の一層の増加につなげていきたいと考えております。以上です。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございました。引き続きまして藤原さんよろしく申し上げます。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

私は下関市の観光政策課課長をしております藤原と申します。私も隣の宮崎課長と同じで4月1日に観光の方に参りまして、観光で言うとちょっと素人な部分でございますけど、観光政策課には10年前にもお参りして、その後国際課とか港湾局といった所を回っておりますので若干インバウンドは詳しいかなと思いますので、下関市のインバウンドの関係についてちょっとお話をさせて頂こうかなと思います。

特に下関市は観光統計の中では、外国人観光客数というのはとっておりません。ですから何年度が何人とか昨年度が何人という事は言えないのですが、昔からやはり下関という地域の特性だと思われませんが東アジア、特に中国、それから韓国からのお客様というのは毎年来られております。特に関釜フェリーというフェリーが下関にはございまして、これは1970年に戦後初の国際定期航路ということで就航いたしまして、現在では年間約20万人のお客様を運んでおります。往復で20万人でございますから入ってくるというか、そのうちの半分の方が入国をされる方でこの中のほとんど、9割くらいが韓国からのお客様ということになっております。

以前は、この関釜フェリー以外にも中国・青島市というところにオリエントフェリーというフェリーがございまして、このフェリーも年間1万人以上のお客様を運んでいましたが、昨年12月に残念なことに運休に入りまして、今のところ運行再開の努力を、主に会社の方で努力されている状況でございますが、こういったことから古くからアジアとの海の航路ですね、先程北九州の先生方が北九州空港のことをおっしゃられていましたけれども、下関市っていうのはどうしても空港をもっていないところでございますので、海に特化したインバウンド、そういったことを昔からやっておりますし、現在も継続しております。

現在特にやっているのが、最近福岡であったように、それから長崎、そういったところでの中国からのクルーズ客船の誘致です。こういったものにも昨年ぐらいから取り組んでまいりました。一応昨年は中国から2万7千トンくらいの船で、お客様が1度に9百名くらい乗る船でございますが、これが3回ほど中国の方から寄港いたしました。今年度につきましては今5月から6月にかけて中国の方からクルーズ船2万5千トンくらいの船でございますけど、今後定期的に下関港の方を利用するようということ今話を進めてお参りして、これが実現いたしますと今後年間30回くらいの寄港になるのではないかなと思います。これも1千人くらいのお客様が乗っておりますので、30回入ると3万人のインバウンドというものも獲得できるということになりますので、大きなものになるのではないかなと思います。

それからあと、北九州市さんもこの4月からやっておられると思うのですが、響灘の港で、こちらの方への大型のクルーズ客船誘致をしています。下関市とういのか関門地域っていうのは船の入港制限がございまして、今までは5万トンまでのクルーズ船しか入れなかったのですが、入れなかったとういのか現在も関門地域では5万トン以下の船でないと入れないですけど、それを外海の日本海側に行けばそれよりも大きな船が寄港することができる、ということで昨年度ですが下関市では長州出島というところに、今最高で13万トンクラスまで入れるようにということで航海検討委員会とういのを開催いたしまして、一応その中ですぐに止められるとういのが7万トンと11万トンとういことになり、今13万トン級については条件付きとういことになっていますので、今後港の整備が出来たらそういった船も入ります。

それから北九州市さんも同じように響灘の方で10万トンを超えるクルーズ客船の誘致とういことで、その船が停まれるようにとういことこの4月から検討委員会に入っております。とういことが実現いたしますと関門両地域で今後中国からのクルーズ客船の誘致は当然一緒にやっていけると思いますし、それからまたそういった響灘や長州出島の方に入ってきた10万トン近くの船とういことになると一度に2千人から3千人のお客様が入ってきます。バスにすると50台から100台とかですね。とうい観光バスが必要になるような状況になりますと、当然下関だけ北九州だけとういのは観光客の受け入れとういのも難しくなってきます。そうすると、関門地域でのとういお客様の誘客とういのもしていけないといけないうことになりますので、今後も観光っていうのは、本当は柵がないとうい境界のないような事業だと思っておりますので、これからはどんどん関門地域では、先程宮崎課長からもお話ありましたけれども、色々な面で協力をしていこうとうい事で考えております。ちょっと話長くなりましたけれども、以上です。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございます。それでは柳井先生よろしくお願ひします。

〔北九州市立大学 柳井 雅人〕

北九大の柳井です。よろしくお願ひいたします。今日はテーマが地方創生と観光産業とういところですので、その関わりについて大学人の立場からお話したいと思ひます。

基本的には地方創生なので大学としては人材と地元定着とういことは非常に念頭にあり活動をしております。現状から言ひますと地元、この関門地域に就職したいなと思ひている学生とういのが全体のだいたい、学生の30%くらい、アンケートを取ると出ております。ところが実際には就職できているのが20%くらいとうい事ですので、学生の80%は外部に出て行ってしまっていると、とうい実態がござひます。ここは何とかしなきゃならんなとういことありまして、1つはできるだけ希望に沿えるように域内就職者を30%にもっていきと、もしくは30%から例えば40%台、ちょっと無理かもしれませんが50%とうい形にもっていきと、そこにはできるだけ近づけていくような活動をしていくとういことが大事だと思ひます。

観光産業っていうのはそういった学生にとって受け入れ先と言いますか、需要が非常に大きなエリアでございまして、それと並びます例えば介護であるとか福祉とかありますけれども、以前出ました地方消滅という本を見ますと、介護福祉も将来は超過密高齢化社会になる東京を中心とした関東圏に学生が介護福祉で出る、90万人くらいがというふうに言われていますので、将来的にはやっぱり雇用の吸収という点で言えばエースは観光産業だと考えております。その他情報とかいろいろありますけれども、まずは観光をしっかりちゃんとやるということが大事なのだろうと考えております。これが1点です。

それから2つ目としては、インバウンドにつきまして実はこれ、エリアをどういうふうにとるかによってだいぶインバウンドっていうのは変わってくるのかなと考えております。インバウンドという絡みで言えば、最大の収入の基盤をなしているのは、やはり下関の人が北九州に来て色々な消費したり、その逆に消費をするというのがベースになるかと思えます。爆買いをする海外の観光客とかにですね、たくさん観光地を誘致して周遊してもらうというのも当然必要なことですが、それに加えてやっぱり北九州と下関の間の観光や食、歴史文化も含めて、ここの結びつきをこれからどうやってまた更に深掘りしていくのかということが大きな課題ではないかなと考えております。北九州市立大学の内田先生のような研究者がフットパスであるとか、流行のオルレであるとか、そういったものを都市型にまた、独自の北九州・下関・関門地域のものに組み替えながら、活発に市民が行き来できるようなものをこれから考えていくということが重要な1つの方策ではないかなと思えます。

最後に3つ目になりますけれども、よく言われるのが北九州・下関っていうのは周遊型観光になっている、宿泊が少ないんだというふうによく言われておりますけれども、そういった点で言えば観光資源はたくさんあるということは今日の報告でもずっとありましたので、そういったものを並べてみますと、どちらかと言うと昼間型であります。夜間型の周遊ルートへ変えるというのが大事なのかなと考えております。夜にご飯を食べて帰れば別ですけども、食べた後に夜出歩いても楽しめるような、そういったものを何か新しい観光資源にして開発するというのが必要なのかなと。例えば紫川で鵜飼をやるとかですね、それとかもう既に組み込まれておりますけれども、工場見学ですね。観光に取り入れるとかですね。そういったところは企業間で連携も取りながら、こういったものを開発していくっていうことが今後とも必要になっていくのではないかなということです。以上です。

3. 観光客誘客のために今できること

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございました。時間がない中でコンパクトにご説明していただいて、ありがとうございます。先程ちょっとお話の中で、宮崎さんが色々な地図を使われているお話がありましたけど、それで実は持ってきたものがありまして、何かと言いますと高山市の地図です。これ全部で何か国あると思いませんか。北九州市さん何ヶ国語対応で考えられていますか。

〔北九州市集客交流担当課長 宮崎 彰三 氏〕

ここに用意しておりますのは、英語、中国語が簡体字、繁体字、あと韓国語です。最近タイ語を含めた5ヶ国語のものも作っています。

〔下関市立大学 難波 利光〕

今、高山市は実は11ヶ国語です。凄いです、ビックリしました。バアって並んでいて同じものかなと思ったら実は違ったので。アジアで言語があるのはタイ語と、ヘブライ語です。この地図作っています。要はそれだけインバウンドのニーズが多様化しているという事です。ゴミ掃除をしたり、トイレ掃除そういう色んな接客と思えないようなところの方々も英語で対応できます。勿論バスの運転手もできます。そこまで徹底して色んな方にも簡単な町の案内が出来るようなところまでするのかっていうのも高山市に行って、これがインバウンドだという感じがしました。

あともう1つですね、先程人を育てるといような、それから地域を育てるといのは、久留島さんとか柳井先生の方からもありましたけれども、以前じゃらんにヒアリングに行くことがありまして、じゃらんの分析の方が言われた言葉で印象深かったのが例えば食です。それから景観を見に行くっていう風に言われるのです。ところが、そこで聞いた話は、もう食では来ないって言われます。何故か、お取り寄せがあるから行かなくても食べられるって言います。それから観光、見に行くか。良いテレビがある。ネット上に良い場所かは映像が出てくるので見に行くより、そっちの方がよっぽど良いって人の層もある。

最後に一番残るのは、やっぱり人だと言います。いわゆるホスピタリティといわれる、おもてなしの心です。結局人に会いに行く、要は観光資源や食事の為のリピーターではなくて、リピーターになるのは誰々ちゃんに会いに行く、あそこのお店のお姉さんが良かった、お兄さんが良かった、何か感じが良かった、だからもう一回会いに行くって言ってSNSで仲良くなってからまた行くねっていうのが一番リピーターになるという話を聞いたことがあります。

それから柳井先生の昼と夜の産業の話ですけども、これ商店街なんかの研究をしていますと、昼と夜の連携って非常に難しいなというのが、要は組織が違います。夜なんかは夜の飲食業組合というのがあり、昼は昼で別です。そうすると同じ戦略をたてようと思っても同じような事を1つでやる場がないです。場づくりっていうのが。そういう色んな所をコラボする場合に本当みんな多忙の中、色々アイデアを出したい。でも中々その時間を取れないというのが、恐らく町であるとか企業とか学生とかそうだと思います。行政もそうだと思う。その話す機会をどれだけ持てるのか、一番の良さを求めるのか、新しいものを見出せられるのか、と言ったところが非常に重要なのかなという感じがしました。

ちょっと一言ずつですね、何か人づくりとか新しい物を作ったとかの事例はありますか。行政はもっと新たに何かできる、この未来に向かって、この関門地域がもっと何か飛躍する、期待値がポーンと端的に出るようなものがあれば。すみません難しい質問かもしれませんが、どなたかお答えできる方から補足的な内容でも構いませんけどいかがでしょうか。

〔公認会計士 中小企業診断士 久留島 雄一 氏〕

体験型の観光はトレンドでもありまして、色んな企業さんも最近ベンチャー企業と提携して、そういうのを取り入れているんですけど、非常に注目されています。そういう体験型っていうのは、その土地自体に凄い魅力がある必要がないんです。なので、その地域にいる人達がおもしろいと思う体験イベントを作りあげれば簡単に出来る事だと思っています。あとはそれをどう全国的に、世界的に広めて、知ってもらって、来てもらって、またリピートしてもらうか。このサイクルをいかにつくるかっていうのが非常に重要だと思っています。これが出来れば関門地域はかなり発展するかなと思っています。

〔下関市立大学 難波 利光〕

簡単な事なので誰でも出来ることや、やろうと思う、思ったじゃなくて、やってみようということだと思います。行政の方いかがでしょうか。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

もう当然、いま久留島先生がおっしゃられた通り、基本的におもてなしっていう言葉自体も行政がやるものじゃなくて民間の人達がやるもので、民間が考えて、その為のきっかけ作りっていうのを私達がする事であろうと思います。ですから私達としてはそういったきっかけになるような提案をしてそれを継続するためのものを色々考えてやっておりますし、逆に皆さん方の提案を聞いてそれをどういう風に援助出来るか。そういったことも今考えてやっているところでございます。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございます。今の提案、よく昔は行政にやると陳情とかしていました。嘆願みたいな。今言われているのは住民の方から出さない行政はやりません。僕この位のスタンスで良いと思います。今これだけミニマムになっている、行政がミニマムになっている時代ですので、積極的というよりも住民ニーズを酌んでいくという先程の総務省とか、そういった方向性の目線からも、やはり住民の方から考えるというクセ、民間の考える、それで行政が出来る事は何かを探求するというような流れに来ているのかなという気はするわけです。

〔北九州市集客交流担当課長 宮崎 彰三 氏〕

1つ言えますのが先程から人づくりと同時に滞在型、周遊型から宿泊型に近づけていくことも1つの課題になっているかと思っています。その中で例えば関門地域で、0.7日の観光をしましたが、でも宿泊はしませんでしたというところが、北九州市でいえば関門の、門司区以外のところで夜景でありますとか産業観光、産業遺産、そういった観光をして更に0.5日過ごしていただければ足して1.2日になって宿泊してもらえるとかが。そういう取り組みを下関市さんも関門海峡以外でされているように私共はやっていけないといけないと思っております。その中で先

程の農業の体験ですとか、あるいは私共力を入れております産業観光、あるいは産業遺産の観光についても観光ボランティア育成ということも取り組んでおりまして、そういった方とのふれあいというのが1つあると思います。あと夜型観光という事でいえば是非、歓楽街に来ていただいて、地元の人達とふれあう機会をもっといただく。そういった場もありますので、そういった事も少しPRしながらですね、ふれあう機会を増やしていく事が出来ればと思っています。

〔下関市立大学 難波 利光〕

最近、学生達があんまり飲まないです。皆さん良く飲みますか。何か昔に比べて飲む機会が、誘っても嫌って言って中々飲まないですけど、僕だけの問題でしょうか。観光ガイドのことで、富岡製紙を見に行った時に、あそこ滞在っていうか見に行くのと大体20分位で見て終われます。それをやはり1時間位延ばそうとすると、そこで観光ガイドのおじちゃん、おばちゃんが役に立つのです。その方々が色々喋ってくれる事によって滞在時間を引き延ばすことができます。ただ時間、説明するだけではなくて滞在時間や、あの人のガイドが好きみたいなフリークを作るんですね。その人が大好きみたいな。そういうのが出来ることによってまたリピーターになる。やっぱり人を育てるっていうのが観光ガイドのひとつなのかなと思います。

〔北九州市立大学 柳井 雅人〕

観光資源の掘り起こしと言いますか、そのあたりを観光者目線、客観的な目線で判断出来る形でどうやって育成していくかっていうのは特に大事だと思うんですけど、その場合の主要な行為者といえますか、主体というのは、ひとつは学生でありますし、もうひとつは住民です。そのあたりで特に、よそ者といえますか外部から来た方の方がその点ではかなりセンシティブな形で分けられるって方が多いと、認識できる方が多いと思いますので、そういった方の意見っていうのをスムーズにどうやってこう、行政としては汲み上げていけるのかなと。そういったところが非常に大事なのではないかなと思います。

4. 質疑応答

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございます。色んな焦点が出てきましたけれども、このあたりで15分ほどフロアの方から、どの先生かにご質問いただければ幸いですけれど、いかがでしょうか。

〔来場者からの質問1〕

質問というわけではなく、お願いという事で手を上げさせていただいたんですが、私昨年まで市役所の職員でした。観光を担当させてもらったり、メインは周南の方だったんですけど、こうやって九州の方々と本州の方が交流されているのは素晴らしいなと。もっと県の東部も盛んになればなと思ってはいるんですけど。そういう行政の実体といえますか課長さん、良くご

存知だと思うんですが、やはり1つの壁となる議会です。行政、民間っていうのが大事だと思うんですけど、是非とも議員の先生方もお仲間に入れてヨイショしながら。彼らのポージングも上手く力になると思います。当然議会の中では足の引っ張り合いというのもあると思うんですけど、まあそれはそれとしても、より皆さんと一緒に彼らも一緒になってやっていきたいと思ってらっしゃいますので、このような研究会、また色んな局面でも議회를、言わば使いたいと思いますので、是非それも、私も周南の方で頑張ります。よろしくお願いいたします。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

ありがとうございます。本日も市議会の方、議員さんも何人か来られています。下関市っていうのは非常に観光については議員の先生方が非常にご理解申していただいておりますので、非常に提言も多いです。本当に一緒にやっていくという感じでやっていますので、これからもどんどん、そういう形でお互いが意見を交換しあって、良いまちづくりとか良い観光を作るためにやっていこうと思っています。

〔北九州市集客交流担当課長 宮崎 彰三 氏〕

今下関市さんおっしゃられたように観光の分野に関しましては本当に、議員の先生の皆様にご熱心に提言いただいております。色々な提言いただく中ですぐに来るもの出来ないものありますけれども一つ一つ実現に向かって努力していきたいと思っています。

〔下関市立大学 難波 利光〕

僕の研究報告でもありましたように、ここの壁って比較的、観光っていうのは低いのでやり易いですね。ですので、これは本当何かすごく高いハードルの中でやるような事業ではありません。身近にポンッとできるような事ですので、ちょっとしたきっかけ作りなのかなという気はするわけです。他にいかがでしょうか。

〔来場者からの質問2〕

最近の新聞で民泊が全面的に解禁されたということ。久留島さんが言われたように泊めてあげた所のおばさんが観光客と一緒に何かやるっていう事で、そういう観光が広がっていけば望ましいとは思っています。民泊って地域創生の面で言えば空き家対策みたいな意味もあるのでしょうけど、民泊が広がっていけば良いとは思っています。そういう形の観光資源が出来れば良いと思います。行政としてそういうふうにしていくのに、どんな事が政策として考えられるのか教えてもらえれば有難いと思います。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

まだ実際のところ民泊は、下関市では具体的に出してはおりません。何故かというとな下関の宿泊のキャパシティーです。キャパシティーと宿泊されるお客様っていうのが、まだやはり宿泊

数の方が多いということで、お客様が少ない。ですから私達、行政の宿題っていうのがまず滞在時間を延ばして宿泊者を増やすという段階のところがございます。そういう事になってくると当然民泊という話も出てくるでしょうし、それから特に民泊、今は使われている方っていうのは海外からのお客様です。これが非常に多いと私も認識はしておりますので、今後海外からのインバウンド、そういったものも我々が増やしていく事によって民泊というものも一緒に付いてくるのではないかなと思っております。ただ出来るだけ早くそういう民間の方達が自分たちの空いたところで、そういう宿泊もやってみたくてかという声を聞きたいというのが本音のところでございます。そういう事の為にこれからも我々は一生懸命やっていかなければいけないと思っております。

〔北九州市集客交流担当課長 宮崎 彰三 氏〕

ほとんど下関さんがおっしゃっていただいたんですけど、事情は非常に似通っております。現在の宿泊施設、ホテルですとか旅館ですとか、まずはそちらの稼働率を上げていくというのが1つの大事な課題でございますが民泊についても、並行して今後も勉強していきたいと思っております。

〔下関市立大学 難波 利光〕

これも結局住民の方からこんな活用ないかというのを提案してみるのもありということです。行政の方からどうって言うより、っていうこともあるのでしょう。私も下関で今、赤間神宮の向かいでゲストハウスをやっているグループの中の一人で手掛けています。ゲストハウスっていうのもこれから特に伸びてくるだろうと言われてます。大体一泊が三千円前後です。ただ泊まるだけという所です。ですがこれ非常に色々なチャンスがあるなと思って、値段が安いぶん、お金がないから安いから泊まるっていうのではどうもないらしくて、実は泊まる費用は安く抑えて、飲み代や交流の時間とかにお金を使いたいというようなニーズも要は増えてきているというふうに聞きます。ですから恐らく色々な形が、お客さんの中でも多様性っていうのが市場いっぱい膨らませる機会がこれからもっと生まれることは期待しているところです。どうもご質問ありがとうございました。

〔来場者からの質問3〕

シンポジウムの観光の問題で先程レポートされました空港の問題で1つご意見を申し上げたいと思います。特に下関市内ではなくて北九州市内の先生方の方へ聞いていただきたいと思えます。今の北九州空港 10 年前と先程おっしゃいました。問題は、私だけだったかも分かりませんが、直前にあの計画が分かったのです。耳をそばだてておれば理解できたか分かりませんが、気が付いたときには方向は南北です。皆様方は北九州にいつ頃からだか知りませんが、昔の曾根の飛行場は東西で住宅地の上を飛ぶから、危ないから、騒音があるから、ということもあったと思います。南北だったら上昇と下降は全部下関の真上を飛ぶんです。十数

キ口しか離れていない下関地域、有視界飛行だと機影が真上に見えて大変なんです。騒音もあるし、騒音の基準、国が作る基準はもちろんクリアしているけれども、やはりうるさいし危険性がある。

問題はこれからです。先程のレポートは、運営の話でした。現在の空港をどうするかってことですが、これから拡張の計画があります。特に関門海峡の土砂の問題として必ず空港が活用されるはず。津屋崎の沖に国際空港を作る話が今のところ駄目になりました。福岡空港の板付の拡張がやられていますが、板付だと若干遠いから北九州は必ず国際空港に向けてやると思います。3,500 や 4,000 とか長距離でやる。大型飛行機の大型化。飛行機の資材が開発されて小さくなれば良いですけど、やはり現状は大型化する。滑走路延長する。そうすると、今より北側にやるとますます下関大変なんです。

是非先生方ご研究されて特に開発は、必ず環境等の問題が出ます。だから環境の専門の先生方も巻き込んで、本当に安全で安心できる空港を北九州一部だけの利便性だけじゃなくて、下関にも影響があるという事を是非これからお考えいただき、学術的にも検討されて良い空港をこれから作ってほしい。聞いていただくだけで本当は結構なので、今専門家の方いらっしやらないと思いますから答えは要りませんが、是非そういう事を下関市民は考えているという事を、ご理解をしていただきたいと、よろしく願いをいたします。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ご意見ありがとうございました。シンポジストに対してではないですけども、北九大のご報告された先生の方で、何かご回答があればですが。ではまた後ほどということにさせていただきます。

〔来場者からの質問4〕

先程、海・海路の問題がありましたけれども、今秋でかなり本気で取り組んでいるジオパークのことですね。これをこっちの方にも延ばしたらどうかという事が1つ。それから、それと同時にクルージングの問題です。もう1点はですね、土日にもものすごく角島の橋が渋滞するわけです。シーズンだけでも、あるいは土日だけでも元の海路に、船で渡ると、そういうふうなことは可能か。その2点についてちょっと先生方にご意見を頂ければと思います。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

ジオパークについての延長っていうのは、今のところ下関の方では考えていないところですので、その辺はまた今後の効果であったりとか、そういうものを考えていこうとは思っています。クルージングっていうのはちょっと私よく分からないのですが、どういうあれですかね。

〔来場者からの質問4〕

ずっと、江崎あたりから下関あたりまでそういうジオパークを見ながら。

〔下関市観光政策課 藤原 良二 氏〕

通常の遊覧船のような感じのクルージングという事ですね。非常にこの北浦の海岸線っていうのは美しい海岸線でございます。今、一生懸命陸側と言うか「Rさんなんかは「みすゞ潮騒列車」っていうのを走らせて、陸側から見て頂くというのをやっております。そういう意図で将来的に海の方から美しい北浦の海岸線を見て頂くっていうのも、これも1つの観光の資源になるのではないかなと思います。なかなか、行政でこれやりますよっていうよりも、本当は民間の人たちがこういう事業やっていきたいというので相談があれば、我々はそれについて検討していくという事になると思います。

それから土日の角島の状況でございますけど、あそこは確かに「道の駅ほうほく」も出来まして非常に渋滞をしております。角島だけでも渋滞していたのが道の駅が出来て余計に渋滞。これは観光のサイドから言うと嬉しい悲鳴ではございますけど、できるだけ解消しないといけないと思います。経路としては豊田の方から回る道であったり、最近パソコンやナビ等を見ながらそういう経路を使う方もいらっしゃるんですけど、根本的にはやはり道が広くなるといけないとは思っています。今、山陰道ですかね、そういったものの早期の開通等といった話も出ておりますので、まずそこらへんが解消されないとなかなかという所でございますので、ちょっとお時間かかるのではないかなと思っております。

〔下関市立大学 難波 利光〕

ありがとうございます。それでは最後になりますけれどもよろしくお願いたします。

〔来場者からの質問5〕

今日のテーマは本当に全て興味のあるテーマでして、これは何としてもさっきの話で、産官学金連携で取り組んでいかないといけない重要なテーマだと思います。特に地方成長の中において、観光をキーワードに街の賑わいを構築していくかということになるかと思えます。特に関門でいうと空港の活性化とか港湾の活性化と繋がって、その中でインバウンドとか外国の観光客を呼ぶとかいう大きなテーマです。ハード面とソフト面と両方あって、ハード面はかなり行政の方でも力添えを頂かないといけないのですが、ソフトはさっきから出ていますように民間ですね。民間がいかんやる気を起こしてやるかということになる訳ですが、逆に考えると、これやっぱり商売として成り立つかどうかという事が非常に大きなテーマになってくると思うのです。そうすると利益ですね。

例えばインバウンドのお客さんを連れてくる、これは誰が営業やるのか。それから広報をどうやってやるのか。そうした時に街が果たして免税店まで突っ込んでやれる力があるのかとかですね。そういう点が非常に各論になった時に、これまた非常に興味があるという重要な課

題をたくさん抱えていると思いますので、今日はこれ、時間が非常に短いくらいで、今後下関と北九州で力を合わせて研究を深めるという意味でも、北九州でも大いに皆さん議論して、各論のところはどうやって成果が出来るのか、利益が出るのかというようなテーマを是非やっていただければと思います。感想ですけれどもよろしくお願ひしたいと思います。

〔下関市立大学 難波 利光〕

貴重なコメントありがとうございます。時間の方もだいぶ経ちました。最後シンポジストからと思いましたが、ちょっとお時間がございませんのでご了承ください。本日は、こういった関門のテーマにして、地方創生、それから観光というそういったところが上手く連携し合う形をどう作っていくのか。恐らくそれは行政主導ではなく、住民や民間がやはり色々な提案をしてそれに十分行政がサポートをしていくという体制が今求められてきているのではないかなと。もう行政にお任せしていればという時代ではなくなっているのではないかなと思います。これ全国色んな所でもそういった傾向に今あります。そうしますと、こういったところで大学であるとか、学生であるとか、それから地域を作っていく皆さんがこの観光産業をいかに伸ばしていくのかという一員であるという自覚がかなり必要になってくるのかなというふうに、今日のお話しを聞いていても思いました。更に関門の地域にはすごくポテンシャルがあるのだなということがよく分かります。

私は、下関市立大に来て9年ですけれども、皆惜しいって言います。こんなに色々あるのに何で活用できないのかということが惜しいです。だからこれ無いって言うと、無い事は無いとみんな反論されます。言われていることまさにそうです。ですけど、使うときに何かうまく使えないです。そこの部分をうまく回すことが出来れば本当に多分、世界中に発信できるポテンシャルは無茶苦茶あるのではないかなというので、私も強くここに関わっていきたいと思っていますので、これからも皆さんのお力と共に我々も一緒に頑張っていきたいと思っていますのでよろしくお願ひいたします。

本日はこういったミニシンポジウム、ちょっと50分ばかりでしたけれども、お時間を共有できてどうもありがとうございました。



写真 ミニシンポジウムの様子